醉夢樓隨筆

秋の植物

川崎正悦

△オミナエシ

先日数年振りで能勢の妙見山へ採集に出掛けた。八谷の道を歩いていたら女郎花があちらこちらにひよろひよろと黄色な粟粒をさゝげていた。芭蕉翁の

ひよろひよろと猶露けしや女郎花

の句を思い浮べたが、その道は露けしどころではなく草は萎え、木々の葉もほこりにまみれていた。種々の植物と共にオミナエシも二、三本胴乱に納めた。私はオミナエシの秋草らしい感じが好きなのである。

然しその翌日は前夜の夕立で非常に涼しかつた。一輪挿の女郎花を眺めていたら、生田春月の「初秋」の中にある女郎花を思い出した「……蚊帳越しに見える卓の上に一輪挿が置かれていて、それには家のものが昨日『もう、こんなに咲いたのが出ましたよ、花屋に……』と挿してくれた女郎花花が一枝

すつきりとした直な茎の一節から左右に一本づゝ小茎が分れ出て、その小茎のきつさきに、またさゝやかな茎が、もう房のように幾つも出ていて、粟粒のような蕾と花とがプツプツと宿つている。とうした女郎花の姿は、なまめいたという感じではなくて、いかにもあつさりとして、可愛らしい純真さのそれである。十七、八にもなつて、少しも身体つきが脂ぶとりにふとらないで、すんなりと身丈ばかり伸びている腰の細そい少女という感じ、白い綺麗な歯を仄見せて、笑つたり、爽やかに語したりする娘の感じに、これをたとえようか。

私は女郎花を見ると、草の丘、もしくは山の裾野、雑木林の中、川の土手、池のほとりの草むらなどを直ぐに思い浮べる。また女郎花の根元で、チロチロと啼く虫の声を思い浮べる」春月の文は中々うまく女郎花を描写したものだと感心する。私には猶それからそれへとオミナエシの思い出が続く、父は初茸が好きで（私の郷里は八戸だから松茸はない）子供の時分秋になると、よく父に連れられて初茸狩に行つた。するといつも女郎花の天辺に赤蜻蛉が止まつているのを見掛けた。少年の頃の思い出。又蒼前平（ソウゼンタイ）を黎明に歩いた時の思い出、蒼前平は青森県と岩手県の境にある広莫たる平原である。旧暦の盂蘭盆前であつたが、東北の秋は早く冷えびえとした朝風が渡つていた。原は一面に女郎花で黄色に彩られていた。突然けたゝましくチチツクワイと鶉が啼き出した。するとあちらからも、こちらからも、友の声に答えて鳴く。広々とした女郎花の原に聞く晴天の鶉の声はたとえようもない清々しいものであつた。

昔深草の里の鶉は、歌にも詠まれて有名であるが、これは又趣を異にした雄大さがあると思つた。又登破した日本アルプスの雪の連嶺を背に疲れた足を運ぶ高原にマツムシソウや桔梗に交つて咲いているオミナエシも忘れ難い印象である。

オミナエシを八戸地方では粟花と呼ぶが誠に粟粒の様な小さな花で、人はあまりその一つ一つの花に注意して見ないがオミナエシは合弁花冠でよく見ると五つに裂けて居り雄蕊は四本である。オミナエシは普通女郎花と書くが、これは日本名で、こんなのを漢字名と云つて正しい漢名と区別する。漢名は敗醤と書いてある本が多いがこれは間違いで、敗醤はオトコエシの漢名である（牧野日本植物図鑑）オミナエシの漢名は黄花龍牙が正しい（植物名実図考）敗醤と云うは、この類の植物は花瓶にさして数日経くと味噌や醤油の腐つたような悪臭を発する処から支那でこのような名を付けたものである。

オミナエシはオミナエシ科のオミナエシ属に属する。この属にはオミナエシに似て白い花のオトコエシ、オミナエシとオトコエシの中間形で花も黄白色のオトコオミナエシ、高山に生じて葉がカエデのような形のハクサンオミナエシ、又北部山中の湿地に生ずるマルバキンレイ北海道の高山に生ずるタカネオミナエシなどがある。

△ワレモコウ

ワレモコウは本州各部及び北海道に分布するごく普通な秋草である。大して美しいと云うでもなく芳香も無いが、あの褐紅色の円つこい花穂が野趣に満ちているので茶人の花瓶にも雅趣を添え、里のわらべ達にも団子花、苅萱坊主などゝ呼ばれて愛される。

月見の花瓶には芒や萩と共になくてはならない花である。吾亦紅は憶良の七草にはもれたが、紫式部は源氏物語の匂宮にワレモコウを「秋は世のめづる女郎花、さをしかのつまにすめる萩の露にも、をさをさ御心うつしたまはず、春を忘る菊に、衰え行く藤袴、ものげきわれもかうなどは」云々と取り上げているし、徒然の法師も「秋の草は、萩、薄、きちかう、女郎花、藤袴、しをに、吾亦紅、苅萱、龍膽、菊、つた、葛、朝顔、いづれも、いとたかゝらず、さゝやかなるが互に繁らぬよし」と述べて居れば以て名誉とすべきである。吉植庄亮氏の歌

大東の馬草露けしはじけ出て
　　海老色の玉の吾亦紅の花

の光景は農家の庭先きでしばしば見受けられる。漱石の句には

路岐れして何れか
　　是なる吾亦紅

があり

旅の歌人牧水は

　吾亦紅薄刈堂秋草の
　　淋しきはみ君に送らむ

と詠んでいる。

ワレモコウはイバラ科のワレモコウ属 Sanguisorba に属する。吾亦紅と書くのは漢字名で、漢名は地榆である。その葉がニレの葉に似ていて、地に布いて生ずるからであると云う、ワレモコウの花には花弁がない、あの暗紅紫色の花穂は、蕚の集団である。蕚は四蕚片からなり、中に四雄蕊がある。ワレモコウによく似た種類にオヽワレモコウがある。これはワレモコウに比して全形が剛壮で葉に軍配がある。私はかつてこれを福井県大野郡の打波渾沌で採集した。又東北地方には、小葉が狹長で花穂が長く雄蕊の突き出た白花種ナガホノシロワレモコウが多い。高山に生ずるカライトソウも同属である。庭園には欧州原産のオランダワレモコウが栽培されているのを見掛ける。

ワレモコウの根は多量の單寧を含み、藥草として知られ漢法では收斂剤として吐血、下血、溶血、月経過多などに用いる。

△サルスベリ

散れば咲き散れば咲きして百日紅　　千代女

露伴の百花譜に「雲の峯の天にいかめしく礦礫も火炎を噴くかと見ゆる夏の日、よろづの草なども弱り萎るゝ折柄、此花の紫雲行きまどひ、蜀錦碎け散れる如くに咲き誇りたる、梅桜とはまた異なる趣あり。掃けども掃けども又しても新らしく花の散るとて、小僧はつぶやくべけれども、散りても散りても後より新らしき花の咲き出づるは、主人の喜ぶところなるべし。木ぶりの痩せからびて老いたるものめきたるにも似ず、少女のやうに、おのが肌に手の触るれば、身を慄はして戦くは如何なる故にや。をかし」とある。

サルスベリの樹皮をなでると、梢まで伝つてよく慄えるので支那では此の樹を一名怕痒樹とも呼ぶとの事である。痒を怕る（かく事を恐れる）の意である。同じ事を目擊しながら龍野地方では笑う樹と呼ぶ所があると聞いたことがある。支那のは何か陰気臭く、龍野の方は陽気で面白い。富岡鉄斎翁は百日紅を

　雖道花無紅百日
　　紫薇長放半年花

と花期の長いのを頌して居るが、神経質な芥川龍介は「澄江堂雜記」に「自分の知れる限りにては葉の黄ばみそむる事、桜より早きはなし、槐これに次ぐ、その代り葉の落ち盡すこと早きものは、百日紅第一なり。桜や槐の梢には、まだ疎に残葉があつても、百日紅ばかりは坊主になつて居る。梧桐、蕉芭、柳など詩や句に揺落を歌はるゝものは、みな思ひの外散る事遲し、一体百日紅という木、春も新緑の色深き頃にならねば、容易に赤い芽を吹かず、長塚節の歌に

　春雨になまめきわたる庭ぬちに
　　おろかなりける梧桐の木か

とあれど、梧桐の芽の吹くは百日紅よりも早きやうなり、朝寝も好きなる、宵寝も好きなること百日紅の如きは滅多になし、自分は時々この木の横着なるに、人間同様腹を立てることあり」と神経を尖らしているが、サルスベリは東印度の原産であるから日本では澄江堂主人のように腹を立てるのはちと無理である。猛夏のシンボルの様な百日紅も

　秋蟬の鳴きいそぎるる宵の口の
　　百日紅に残れるあつさ　　吉植庄亮

となると早や蕭条の秋が一日一日と近づいている。サルスベリは、木登り達者な猿も辷り落ちると云う意味でつけた日本名で百日紅、紫薇は漢名であるサルスベリはミソハギ科の Lagerstroemia サルスベリ属で種名は印度原産を現わして indica リンネの名命である。

渡来の年代は判明しない。幹の高さ3乃至7m樹皮は滑沢で、葉は全辺長楕円形で、対生、枝梢上に穂を成して花を簇生する。鉄斎の詩の如く、花期が甚だ長い。蕚は球形で6裂し、花弁は雛縮して長い柄がある。時に白花のものもある。

大和の大峰山に、百日紅が自生していると云う話を聞いた事があつた。サルスベリは我邦には自生などあるはずがないから何かしらんと思つて居つたが昭和4年8月に山葵谷から大峰山に登つた処が、如何にもサルスベリそつくりの樹肌のものが沢山ある。然し梢の方が全く異る、百日紅とは別科の植物で、ツバキ科のメシャラであつた。この植物はサルナメリと云う異名がある位で樹肌はよく似ているので此地方ではヒメシャラサルスベリと呼んでいることがわかつた。サルスベリはミソハギ科の植物である。

又秋田県能代地方ではサルスベリを雷避けになると云つて、庭に植えて居る家が多い。猿の代りに雷を辷らすつもりか、又各花弁先きが円く絵に描いた雷公の太鼓に似ているから、太鼓で雷を銜ろうとするのか、どちらにしても滑稽味があつて面白い。